

アメリカの公立学校における国旗掲揚運動の起源と機能転換

— 統合から排除へ —

The National Flag Movement in American Public Schools in the Late 19th Century:
In Search of Diversity or Unity?

宮 本 健市郎 *

Abstract

All children in American public schools are usually obliged to pledge allegiance to the flag of the United States and to the Republic. While the ceremony arouses patriotic sentiment in children, it seems to prevent children from thinking critically or deliberately about the meaning of the ceremony and the words. This paper aims to (1) delineate the beginning of the national flag raising ceremony and pledge of allegiance in the public school, and (2) consider whether the national flag movement integrated various peoples into American citizens or excluded others with particular ascriptions.

The Civil Rights Act (1866) and the 14th Amendment to the U. S. Constitution (1868), which was enacted after the Civil War, made all the people born in the United States American citizens. Theoretically, every child was given a chance to learn in public schools, which led to diversity in schools. Although the national flag was displayed in every battle field in the Civil War, it was rarely hoisted on the public schoolhouses.

In October 1892, Columbus Day celebrations were held in many cities in the United States. The official program was published in *The Youth's Companion* edited by Francis Bellamy, which included a proclamation by President Harrison. According to the program, almost all public schools in the United States hoisted the national flag on their schoolhouses, and children participated in the celebrations and pledged allegiance to the flag as a symbol of diversity and unity.

In the 1890s, the national flag raising movement prevailed even more widely owing to the activities by the editors of *The Youth's Companion*, Grand Army of the Republic (GAR), and some other closely-related organizations. They often presented the national flag to public schools and persuaded children to be patriotic. Some boards of education held flag day ceremonies under the auspices of the GAR.

After the movement succeeded, all children were forced to pledge allegiance to the flag. Some children or teachers who refused to pledge allegiance to the national flag were expelled from public schools. Consequently, the American public school system lost diversity in the 1890s.

キーワード：国旗掲揚運動、愛国心教育、国旗忠誠宣言、アメリカ公立学校、コロンブス記念日式典

はじめに

自由を至上価値とするアメリカ合衆国において、公立学校で国旗が掲揚され、すべての子どもが国旗への忠誠宣言を、事実上、強要されているのはなぜであろうか。本稿は、19世紀の末に公立学校で国旗掲揚と、国旗と国家への忠誠宣言の儀式普及を推進した運動（国旗掲揚運動と表記する）に焦点を当て

て、この運動が公教育の多様性にどのような影響を与えたかを考察することをねらいとする。

アメリカ合衆国は、南北戦争を経て市民権法と憲法修正14条を制定し、多様性を前提にした国家統合を成し遂げた。統合のシンボルとして重要な機能もったのが国旗である。南北戦争以前にはいろいろな形の国旗があったが、20世紀のはじめに現在の形に定まった。ところが、1890年代から、公立学校で

* Kenichiro MIYAMOTO 関西学院大学教育学部教授

の国旗掲揚儀式が広く普及し、1910年代には国旗への忠誠を拒否する人々を公立学校から排除する事例が各地に現れた。統合と自由と正義の象徴であった国旗が、特定の人々を学校教育から排除する機能をもつようになっていたのである。

国旗や忠誠宣言の成り立ちについてはかなり広く知られているが¹、子どもと学校教育に焦点を当てたものは少ない。本稿は二つの課題を設定する。第一に、愛国心の涵養と国旗掲揚運動が結びついていく過程を解明する。1890年代に、多くの学校は校庭や屋上に国旗を立て、教室には国旗とワシントン大統領やリンカン大統領の肖像画を掲げることが始まった。これらは、アメリカ人の愛国心が高まったことを示す証拠とみることができるが、学校のカリキュラムに明記されることは少なく、実態をつかみにくい。本稿では、新聞や雑誌記事等を活用して、その実態を見ていく²。

第二に、国旗掲揚運動が、教育における多様性を促進したか、否定したのかを検証する。国旗掲揚や国旗忠誠宣言を強要する教育と、多様性を認める教育とは両立が可能であろうか。国旗忠誠宣言の普及を推進した人々の行動と思想の分析をとおして、公教育における多様性の実態を見ていく。

第1章 南北戦争の遺産：愛国心のシンボルとしての国旗

現代では戦場のどこでも国旗を掲げるのが常であるが、学校に国旗を掲げる習慣は南北戦争以前のアメリカにはなかった。公立学校の校舎や教室を取り上げた図書のなかで、国旗を掲揚している図は見つけることができない³、その時代の教科書にも国旗はほとんど出てこない⁴。図1は、雑誌ハーパーズ・ウィークリー（1864年7月16日発行）に掲載されているトマス・ナスト⁵の作品「われらの旗」である。中央の大きな円の説明には「すべての権利の擁護者」、その上の円には「国旗の制作」、右回りに見ていくと、「戦地からの帰還」、「艦上にて」、「死者のまわりに」、「野営陣地にて」、「家庭にて」、「教会にて」、「病院にて」、「戦場にて」、「出征」と絵が並んでいる。国旗と戦争と宗教のつながりは明確に見て取れるが、その中に学校はなかった⁶。1876年の独立宣言100周年の祝祭や、翌年の1877年6月14日の国旗決議100周年の祝典に際して、公共の建物に国旗を掲げようとする運動はあったが、長くは続かなかった。「戦争という熱狂的な事件が歴史になってしまうと、愛国心の高揚は次第に収まっていき、1887年には学校に国旗が掲げられることも少な



図1 われらの旗 Harper's Weekly, July 16, 1864

くなっていた」⁷のである。

学校に国旗を掲げようとする動きは、1880年代末に盛り上がった。ニューヨーク市を例にみてみよう。ここでは、ボルチ大佐 (Colonel George T. Balch, 1828-1894) が活躍した。ボルチは、ウェストポイント陸軍士官学校を卒業したのち、南北戦争に従軍した。戦後はしばらくニューヨーク市の会計監査などをしていたが、1889年からニューヨーク市教育委員会の会計監査に従事した⁸。

ボルチ大佐が精力的に取り組んだのは、すべての子ども、とくに増えつつあった移民に対して、アメリカへの愛国心を教えこむことであった。彼は1889年6月28日にニューヨーク市子ども救済協会に属する教師たちの会合で講演し、その講演を『愛国心を教える方法』(1890)として刊行した。この中で、愛国心教育の方法を五つにわけて説明した。①市民性バッジを子どもに与えて、授業中に身に付けさせる。②品行のよい生徒に報酬として生徒旗を与え、身に付けさせる。③学級全体として遅刻がなく、出席率が良ければ、報酬として学級旗を与える。④学校全体が合衆国に忠誠を尽くしていることが示されれば、学校旗を与える。⑤学校が授業中であるかどうかを示す信号旗を掲げる⁹。つまり、子どもはバッジや旗を好むので、競って愛国心を示すようにさせたのである。

だが、ボルチ大佐は国旗掲揚を強制しようとはしなかった。「愛国者も聖人も法律で作ることはできません。法律をつくることは、本当の愛国心を育てるための王道ではありません。立法化は、この美德を育てるのを促すのに役立つかもしれませんが、それを強制しても無駄です。愛国的な熱情を掻き立てる力は、外からの力で動き出すというより、心のなかから湧き出るものでなければなりません」¹⁰と強調していた。愛国心形成と国旗崇拝とは直結していなかった。

第2章 国旗掲揚運動のはじまり

1. 退役軍人会の活動：愛国心と国旗の結合

子どもの愛国心教育を国旗掲揚と関連づけるのに大きく貢献したのは、米国陸海軍人会 (G.A.R.) であった。この団体は、国旗を公立学校に掲げることを強く主張しただけでなく、実際に多くの公立学校に国旗を寄贈した。その贈呈式が大きなセレモニーとして各地の学校で大々的に挙行された。たとえ

ば、ニューヨーク州ロチェスター市をみると、1889年2月22日のワシントン (初代大統領) 誕生日の式典に合わせて、G.A.R. の支部はすべての公立学校に国旗を贈呈することをきめた。G.A.R. の委員会 は市の教育委員会と協議して、市庁舎で開催されるワシントン生誕記念日式典のプログラムを作成した。プログラムによれば、音楽、祈祷 (G.A.R. 従軍牧師)、祝辞 (市長)、コーラス (参加者全員)、ワシントン言行録紹介、コーラス (生徒全員)、ワシントンとリンカン (講話)、音楽 (楽隊)、自由と統一国家 (講話)、独唱とコーラス、ワシントンの記憶 (演説)、独唱とコーラス、戦場の旗 (演説)、コーラス (参加者全員)、アメリカ国旗に関するシンポジウム、行進曲演奏 (楽隊)、国旗贈呈式、お礼の言葉 (教育委員会委員長)、そして、最後にコーラスであった¹¹。

式典のクライマックスは国旗贈呈式であった。式典のはじめから徐々に子どもの愛国心を昂揚させながら、最後に国旗贈呈式とつなげている。国旗は「永続する忠誠心と愛国心のシンボル」¹²として、子どもの代表に対して、G.A.R. が授与した。国旗は翌年の式典のなかで、子どもから次の学年の子どもに継承される。国旗を直接に受け取る栄誉を担う生徒は、子どものなかから選ばれる。このようなシステムをつくることで、国旗を授与されることがいかに名誉なことであるかを子どもは実感する。国旗が子どもの愛国心を掻き立てる道具であった。

ところが、式典の最後にあった教育委員会委員長の演説を読むと、彼は国旗に対して関心をあまり示していないことがわかる。彼は、国旗の贈呈を受ける理由を、国旗についてはほとんど言及することなく、つぎのように述べている。「公立学校は、社会の中のすべての階層の人々や条件を統一することのできる本当にただひとつの力です。… 私たちが国旗を受け取る理由は、学校が若者を、知的な投票者、公平な心をもった陪審員、正直な裁判官、思慮深く高潔な立法者、清廉潔白で実行力のある公務員にすべきであると、我々が信じているからです」¹³。すなわち、教育委員会としては、国旗を掲揚することが目的ではなく、よい市民の形成がねらいであった。

国旗の配布はG.A.R. の強い意向によって進められた。この式典の経費をすべてG.A.R. が負担した¹⁴ことはそのことを証明している。また、1889年

2月に、すべての学校に国旗を掲げることを求める州法を提案したのはG.A.R.のニューヨーク支部であった¹⁵。グインターが、「教育者や教育委員会が校庭に国旗を掲揚することに異議を唱えようものなら、米国軍人会の会員たちは、彼らに圧力を加えることも辞さなかった」¹⁶と述べているとおり、G.A.R.の強い姿勢を教育委員会が受け入れざるを得なかったのが実情であろう。

公立学校で国旗を掲げる運動を推進したのは、G.A.R.だけではない。G.A.R.の女子部ともいべき婦人救済部隊(W.R.C. 1883結成)、アメリカ革命の息子たち(S.A.R. 1889年結成)、アメリカ革命の娘たち(D.A.R. 1890年結成)などが次々に結成された。退役軍人の関係者が中心になって結成されたこれらの諸団体は、公立学校に対して国旗掲揚式典の開催を強力に求め、国旗掲揚運動を推し進めた。早い例では、1890年に、S.A.R. コネチカット州支部が、6月14日の国旗記念日には、ひろく国旗を掲げるべきであると提案していた¹⁷。D.A.R.は「星条旗」を国歌にすること、国家と国旗を合衆国の象徴として普及させることに熱心であった¹⁸。

このような状況を見ると、教育関係者は愛国心形成には熱心であったが、国旗掲揚を目的としていたとは言えない。退役軍人を中心とした愛国的な団体が最も積極的に公立学校に国旗を掲揚する運動を推進したのである¹⁹。

2. 子どもと国旗：子どもが大人を教育する

退役軍人が学校での国旗掲揚を求めて積極的な活動を始めたとき、子どもは国旗をどのように受け止めていたのか。二つの自伝的児童小説をみてみよう。必ずしも事実ではないが、その時代の子どもの心情をよく示している。

ひとつは、ウィギン(Kate Douglass Wiggin, 1856-1923)が1907年に発表した『レベッカの青春(New Chronicles of Rebecca)』である。この中に「国旗の救出」という章がある²⁰。要約すると次のような話である。レベッカは17歳で女子高等学院を卒業する直前であった。国旗掲揚式の祭典が「この世紀には二度とあるまいと思われるような規模で」実施されることになった。レベッカらの女子生徒が共同で国旗を制作しつつあった。子どもたちは「これ以上は不可能と思えるほど道義心が向上した」。国旗を立派なものに仕上げるためにレベッカがどれ

ほどの努力をしたかが詳細に描かれている。ところが、いよいよ国旗掲揚式の前日になって、国旗が盗まれた。国旗を盗んだのは近くに住んでいて、評判の良くないアブナーというおじさんであった。その時のレベッカの心情をウィギンは次のように表現している。「赤い生地の小さな切れが片隅からのぞいていた。この数週間、食事のときも、眠っているときも、夢の中でさえ思いつづけていた国旗なのだ。見あやまるはずはなかった。待ちこがれ、そのために骨折り、そのために縫った、彼女の偶像の国旗、その国旗が、いまアブナー・シンプソンの荷馬車のうしろにのっているのだ」。そこでレベッカは必死の思いで国旗を取り戻したが、アブナーは国旗を「誰かの洗濯物」とか「ほろっきれ」とけなす。その言葉にレベッカは愕然とする。さらに、アブナーは、「わしは、国なんてものに自分が何か特別な利害があるものか、ないものか、いっこうわからねえ。… わしが知ってるのは、自分の国に一文の借りもねえし、また国のなかに何一つ所有しちやいねえてことだけだ」²¹という。少女レベッカが勇気をもって、不道德な大人にたいして、国旗と愛国心の大切さを教えようとした話である。

もうひとつの児童小説は、ローラ・インガルス・ワイルダー(Laura Ingalls Wilder, 1867-1957)の『大草原の小さな家』(*Little House on the Prairie*, 1935)である。この児童小説をもとに、NBCテレビ版が制作され、1974年から1983年に放送された²²。その中に「100周年記念祭 Centennial」という章がある。アメリカの独立宣言100周年を祝う式典に際し、主人公のローラらが国旗を製作し、ロシア系移民ユーリーがボールの製作を請け負ったという話である。ローラ姉妹は国旗の製作に取り組めることに感激し、熱心に取り組んだ。ところが、ユーリーはボールの完成を前に町を去らねばならなくなった。ユーリーは英語が読めず、土地や家屋についての契約内容を理解しておらず、住む家も土地も失ったのである。それでも彼は国旗掲揚のボールを製作し、村の集会場に持ってきた。そのとき彼は、「契約書が読めなかったのは自分の無知のせいだ。ロシアには自由がなく、皇帝が君臨している。アメリカには自由がある。子どもは無償で学校に行ける。子どもは親に英語を教えてくれる。自由の国アメリカを誇りに思う」と語ったのである。この話でも、移民も愛国者であること、国旗を崇拜する子ども、そして、

子どもが親を教育する姿を描いている。

いずれの話も、19世紀末に子どもが国旗を神聖なものとして受け入れたことを詳細に描いている。そのころ、国旗を崇拝する感情が子供の間で広がったことは確かである。そして、それが大人にも大きな影響を与える契機になるのである。

現実にも子どもに最も強い影響を与えたのは、子供向けの人気雑誌『若者の友』であった。この雑誌は、子どもに国旗を崇拝する心情を惹き起こすことに力を注いだ。「公立学校に掲揚された国旗がもつ愛国的影響力」という課題で、子どもからの作文コンテストを開催したり、自前の国旗を掲げている学校に、「学校での国旗の掲揚」の挿絵付き記念版を無料で配布したりした²³。『若者の友』に掲載された記事には、以前は意味のない布の切れ端だったのに、「それが国旗になるととても重要な意味をもつようになる」と話す教師や、「国旗に対する子どもの感情が大きく変化したことが私にはわかる。言葉では伝わらないことも、国旗を掲げることで子どもの愛国心が作られる」と述べる教師の話²⁴が紹介されている。雑誌が子どもの気持ちをうまくとらえたのである。

3. コロンブス記念日式典の二面性：多様性の保障と統合の追求

国旗掲揚運動の重要な画期となったのは、1892年10月12日のコロンブス記念日式典であった。その日は、コロンブスがアメリカを「発見」してから400年の記念日であり、全国の多くの都市で式典が開催された。式典の公式プログラムは『若者の友』に発表された²⁵。この式典のなかで「国旗への忠誠宣言」という文言が初めて登場した²⁶。文言の作者は同誌編集者のフランシス・ベラミー（Francis Bellamy, 1855-1931）であった。

ベラミーはコロンブス記念日式典の公立学校祝賀行事実行委員会の委員長であった。ミシガン州、テネシー州、ロードアイランド州、マサチューセッツ州の教育長が詳細を決める執行委員であった²⁷。ベラミーは1892年6月ころ、全国の教育長や教育者に手紙を出して、全国の約1300万人の子どもたちを、コロンブス記念日式典に参加させるように呼び掛けた。ベラミーのメッセージには、『若者の友』が式典を提案したこと、NEAも支持していること、全国どこでも同じプログラムにすべきこと、国旗を掲

げ、子どもに国旗忠誠宣言をさせること、教師の指導が重要であること、等が記載されていた²⁸。

コロンブス記念日式典には二つの側面があった。ひとつは、この式典がアメリカ人を共通の理念で統合する機能をもっていたことである。国旗忠誠宣言の儀式は、アメリカが欧州から離れ、一つの国家として統合されていること、国民としての自覚を示す格好の機会であった。とくに注目すべきことは、ハリソン大統領の宣言²⁹を根拠にして、全国でほぼ同じ形式で式典が挙行されたことである。大統領は、「この国のどの学校の校舎にも国旗を掲げよう。そして、われわれの若者にアメリカ市民としての愛国的義務を印象づけるような式典にしよう」と語りかけた。合衆国憲法修正第1章にあるとおり、連邦政府が教育に関する内容を直接に指示することはできない。逡巡するハリソン大統領に、ベラミーが強力に働きかけたことで、大統領の宣言が実現したのである³⁰。大統領が宣言した公式プログラムは以下のとおりである。

1. 大統領宣言の読み上げ（式典主催者）
2. 国旗掲揚（退役軍人）
3. 国旗忠誠宣言（生徒）
4. 神への感謝（祈祷または聖書朗読）
5. コロンブス記念日の唱歌（生徒と聴衆）
6. 演説（4世紀の意味）
7. 頌歌
8. 市民の演説と国歌

このプログラムにしたがって、ニューヨーク市をはじめとして、多くの都市でコロンブス記念日式典が、学校の生徒を駆り出して、挙行された。州全体で取り組んだ場合もあり、たとえば、テネシー州では、教員は式典に参加し、カウティ教育長を通して、州教育長に報告することになっていた³¹。

コロンブス記念日式典がもつもうひとつの意味として、多様性があったことを見逃すことができない。式典の形式についてみると、国旗忠誠宣言の儀式は、ベラミーが定めた方式に統一されていたわけではなかった。胸の前で腕を横にするもの（ベラミー式）もあった³²が、腕を曲げて頭に当てるもの（ボルチ式）もあった。それぞれの都市や町で決めればよかったのである。ベラミーが定めた国旗忠誠宣言の文句は「わが国旗への忠誠」であった。「わが国旗」が「合衆国の国旗」に変更されるのは1923年のことであった。

1892年時点での多様性を象徴しているものとしてとくに注目すべきなのは、カトリック系学校の対応であった。コロンブス記念日式典をもっとも盛大に祝い、誇らしく思ったのは、彼らであった。コロンブスはイタリア人であり、カトリック教徒であった。多くの新聞記事は、式典とともに、コロンブスが科学を信じて偉大な功績をあげたこと、それが科学と公立学校の発展の基礎になったことを強調し、コロンブスを褒めたたえた³³。コロンブス記念日式典は、イタリア系やアイルランド系のカトリックの人々を鼓舞したのである。

ニューヨーク市では10月8日（土）から10月13日（木）まで、大規模な式典が続いた。ニューヨーク発信の記事によれば、「ニューヨークのコロンブス記念行事のなかの一つの祭典である公立学校日は、式典全体のなかでは第二段階にあたっていた。土曜日と日曜日にあった祈祷や宗教的儀式にはあらゆる信条や宗派の人が参加していた。その翌日には、新世界を強力に高みへと押し上げていく教育の力がコスモポリタンなものであることを、同様に示した³⁴と紹介し、公教育が宗派や宗教を超えていることを力説した。10月12日（水）のパレードでは5万人を超える参加者があり、教育委員会の協力のもとに数千の生徒がパレードに参加したが、同時にカトリック系の学校の生徒もこれに加わっていた³⁵。

ニューヨーク州以外でも、多くの都市で宗派を超えて式典が挙行されていた。ミネソタ州をみると、10月22日の新聞に、いろいろな都市で、「公立学校とG.A.R.が公式のプログラムを実行した。カトリック系学校も式典に貢献した。すべての人がまとまってパレードをした³⁶」とある。10月26日の新聞では、朝9時半から式典があって星条旗を掲げたこと、スペインやアイルランドの国旗も同時に掲げたことを紹介している³⁷。ネブラスカ州の公立学校では半日を休日にしたところが多く、他州に比べて式典は大規模ではなかったようだが、カトリック系の学校での式典が注目を浴びた³⁸。ペンシルバニア州フリーランドでは、コロンブス記念日の大規模な祝典に際し、イタリア系の市民がコロンブスの彫像を寄贈し、市が始まって以来最大ともいえる大規模なパレードが実施された³⁹。このようにコロンブス記念日式典がカトリック系の人々から好意的に受け止められたことは、国旗に込められた多様性の保障という理念が堅持されていたとみることができる。コ

ロンブス記念日式典は統合の理念もコスモポリタンな性格を含んでいたのである。

第3章 国旗敬意法と国旗記念日の制定：多様性の否定

コロンブス記念日式典は、国旗掲揚運動と国旗忠誠宣言を普及させる契機になった。その後、国旗掲揚運動はさらに高まりを見せ、多くの州で国旗敬意法が成立し、国旗忠誠宣言が強制的になった。しかし反面で、国旗崇拝の高まりを警戒する知識人も少なくなかった。本章では、まず、国旗記念日の制定にまで至る国旗掲揚運動の成果を確認し、次に、運動に対する批判を確かめる。

1. 国旗敬意法と国旗記念日の制定

ボルチ大佐が1894年に急死したのち、ニューヨーク州で国旗掲揚運動を強力に推進したのは、スキナー（Charles R. Skinner, 1844-1928）州教育長であった。彼はニューヨーク州の下院議員などを経験したのち、1895年4月に州教育長に就任した。就任するとすぐに、国旗記念日（6月14日）に、学校で式典を実施するように州の公立学校に要請した。それだけではない。その年の10月には、国旗掲揚は公立学校教員の義務であり、守らない場合は教職を罷免されると宣言した⁴⁰。1898年4月、アメリカとスペインとの戦争が始まる直前にニューヨーク市内で開催された講演会では、「子どもはもともと高貴な市民性をもつように教育されなければならない。…我々は、アイルランド系アメリカ人、ドイツ系アメリカ人、スペイン系アメリカ人とかをあまりにしばしば聞いている。そのような呼称はアメリカ社会には存在してはならないと言いたい。彼らは完全なアメリカ人でなければならず、さもなければ存在してはならないのだ⁴¹」と語った。スキナーはたびたびこのような演説を繰り返していた。彼の主張は、1898年4月22日に「州内の公立学校において、校舎に合衆国旗を掲げ、愛国的儀式を奨励することを定める法律」（国旗敬意法）となって結実した。スキナーの活動はこれにとどまらなかった。国旗に敬意を示すための儀式をさらに具体的に示す図書を、州教育長の名前で出版した。470頁にもなるその図書には、法律の解説はもちろん、国旗の歴史、意味、国旗を讃える歌等が多数含まれていた⁴²。スキナー教育長が、国旗の儀式を厳格に定め、これに従わな

い教員を排除しようとしていたことは明らかであった。

1890年代には、国旗に敬意を示す儀式を詳細に述べる図書が次々に出版された。ボルチ大佐の肖像画を口絵にいれた『幼い市民のための愛国読本』が1898年に出版された⁴³。その中では、国旗への敬意の示し方や、国旗の起源、頌歌などについて、子供向けのやさしい問答形式で詳細な説明がある。小学校で使いやすい書物であった。青年向けには、たとえば、ユニテリアンの牧師ドルが著した『アメリカ市民』が刊行されている。この書は公民科の教科書として、良きアメリカ人とは何かを説いたものである。市民権の起源、市民と政府、経済的義務（ビジネスと金融）、社会的権利と義務、国際的義務についての解説で構成されている。だが、興味深いのは、1891年版と1906年版の違いである。この教科書の1906年版では、国旗と愛国心が追加されていたのである⁴⁴。

公立学校での国旗掲揚の式典は、1900年代になると、式典で演説する愛国教師がだれであるかに注目が集まった⁴⁵。その式典の主役が、G.A.R. が組織の役職に定めた「愛国教師」であったからである。この役職は1890年代から各地の支部におかれていたようだが⁴⁶、1906年から、「全国愛国教師」という役職が置かれた⁴⁷。1914年には、愛国教師全国協会という組織もできていた⁴⁸。ワシントン誕生日の祝典などで、学校で国旗掲揚の行事が開催されるときには、彼らが子どもたちの愛国心を掻き立てる演説をしたのである。

国旗記念日は、1890年代では州によって異なっていた。2月22日（Pa. 州、ワシントンの誕生日）、2月12日（NM 州：リンカンの誕生日）、9月29日

（Kans. 州）など、州ごとにいろいろであったが、20世紀になると6月14日に集約されていった。1777年6月14日に、大陸会議で国旗として採択されたことにちなんでいる。ジョージ・ワシントンの求めに応じて、国旗をデザインし、縫い上げたとされるベッツィ・ロスの伝説がボルチ大佐の『幼い市民のための愛国読本』や『若者の友』などで紹介された。伝説であるが、国旗記念日を6月14日に定めることが多くの州で受け入れられた理由のひとつと考えられる。コロンブス記念日式典のあと、翌年に半年にわたってシカゴで開催されたコロンビア博覧会では、「アメリカ国旗の家ならびにベッツィ・ロス記念協会」の会員証にロスを描いた絵が掲載され100万枚以上が売れた⁴⁹。

20世紀になると、国旗掲揚運動はさらに広がった。コロンビア特別区で刊行されていた新聞 *The Evening Times* に掲載された公立学校での国旗儀式に関する新聞記事を列挙したものが表1である。コロンビア特別区は州ではないので、連邦政府の意向が最も直接的に反映される場所である。ここでは、新聞記事をみても、国旗掲揚儀式に関するものが他州に比べて抜き出ている。

表から明らかなように、1890年代の半ばから、公立学校で記念式典を開くことは始まっていた。公立学校における式典なので、教育委員会の許可が必要であるのはいうまでもないが（図2）、当初から退役軍人会の強い要望にもとづいていたことは明らかである。事実上はS.A.R.やG.A.R. という退役軍人会が主催と言えるほどであった（図3）。このような動きをみると、1890年代から1910年代にかけて、国旗掲揚の儀式が厳密に定められつつあったことが確認できる。

表1 コロンビア特別区における国旗関連年表 [*The Evening Times* 記事より]⁵⁰

1892.10.12	コロンブス記念日祝典
1896.06.11	国旗記念日祝賀会を開くのに、公立学校はもっともふさわしい。
1898.06.13	4年前から国旗記念日に公立学校で記念式典の挙行が始まった。
1900.06.06	S.A.R. が教育長に国旗記念日の式典挙行を要望
1901.12.07	S.A.R. が公立学校に国旗を提供
1902.06.14	国旗記念日式典は全国的な制度として確立
1903.06.15	国旗記念日の行事は10年目。公立学校の生徒5万人が忠誠宣言
1908.06.03	G.A.R. の Perham が、公立学校での国旗記念日式典で指揮
1908.06.11	特別区教育委員会決議文。市民は国旗を掲げること（図2）
1909.06.10	G.A.R. の愛国教師が国旗記念日を宣言。特別区教育委員会許可
1917.06.14	公立学校での国旗掲揚儀式は G.A.R. が主催（図3）

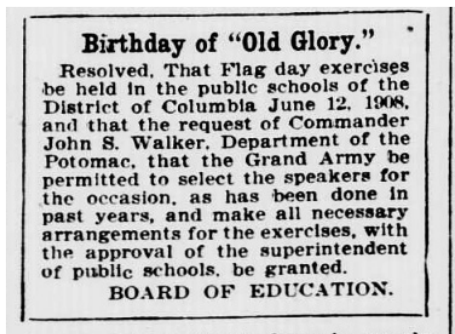


図2 The Evening Star, June 11, 1908

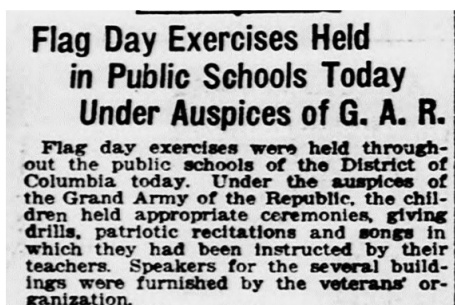


図3 The Evening Star, June 14, 1917

2. 国旗崇拝への警戒

ここまで、国旗掲揚運動が順調に発展してきたことを見てきたが、実は、当初から、その動きに批判的な意見は少なくなかった。先に、ボルチ大佐が国旗崇拝に批判的であったことを紹介した。ロチェスターの教育委員会委員長も、国旗崇拝を強く推奨してはいなかった。

こうした考え方は一部の知識人の間では珍しいことではなかった。たとえば、リベラルな雑誌として知られた『競技場』(The Arena)をみると、1890年にブラウン大学学長のアンドルーズ(E. Benjamin Andrews)の記事がある。彼は、良き市民、愛国者を形成することが公立学校の役割であることを明言したうえで、「確かに、私はこの習慣(国旗を校舎に掲げること：筆者)を心から称賛しますが、現代では、合衆国の国旗が多くの人にとっては盲目的崇拝の対象になってしまう危険性があると危惧しています。十字架の着用だけではキリスト教徒とは言えないように、国旗を校舎のうえに掲げれば、それだけで私たちがこの国の繁栄のために忠実に尽くしているということにはなりません。星条旗に意味があるわけではありません。星条旗が象徴するもの、すなわち、自由、統合、権利、法律、諸国家

の間に善を求める力、これらこそが、市民としての私たちの熱情を正しく刺激するものなのです」(下線筆者)⁵¹と警告を発した。国旗そのものではなく、国旗のもつ統合機能に注目したのである。

ニューヨーク州で国旗敬意法が成立したあとでは、「国旗を汚さないように法律で強制したり、学校の子供たちの目の前で国旗を誇示したり、国旗の日にこの国を讃える朗読をしたり、特別に用意された教科書を使ったりして、国民に愛国心を法律で教え込むことはできない。子どもは成長すると、現実の諸問題に直面するものであり、(国家について：筆者)、経験や観察にもとづかない派手な印象しかないとするれば、幻滅することになるだろう。…かれらは、感情を超えて、深刻な事実を見るのである。…彼らは、理論のうえからではなく、実際に国旗が擁護しているものは何かを問い始めるのである⁵²」と、同雑誌の記事は国旗敬意法を批判した。

プリンストン大学教授のウィルソン(のちの大統領)は、トクヴィルを援用しながら、情報や知識が多様であることが、民主主義の基礎になると考えた。「私たちは、意見を戦わせたり、討論をしたりする知的な国家組織を持っている。したがって、ここでは、意見の相違は、いわば一種の良心の命令であり、私たちが発展し、洗練されていくのは、意見の相違のおかげであり、意見が単一であるからではない⁵³」という。したがって、国旗に対しても自分の意見をもって反発することを認めるのである。

これらの批判は、アメリカ人の愛国心を高めることを求めている点では、運動を推進していた人々と共通の立場である。だが、感情的に国旗を崇拝するよりも、理性的に国旗が意味するところをつかむこと、すなわち、自由や意見の相違を重視していたといえる。そのような多様性を維持しつつ、愛国心を涵養することで、国民の統合を図ろうとしたとみることができる。

3. 国旗忠誠宣言の拒否事件：排除の進行

1910年代になると、学校での国旗掲揚と国旗の忠誠宣言は、ほとんどどの町でも実施されるようになっていた。それと同時に、国旗忠誠宣言を拒否する子どもや親を排除する動きが各地で起こった。いくつかの事例をみてみよう。

1912年10月、ニュージャージー州のハイスクールでは、ニューヨークの会計監査官の息子(17歳)が、

学校の授業を欠席した。親が忠誠宣言の拒否するように息子に命じたのであった。村の教育委員会は少年に再考を促したが、少年は親の言いつけを守って忠誠宣言を拒否するということだったので、結局、放校処分となった⁵⁴。

1912年11月、ユタ州のソルト・レイク市では、13歳の少女が国旗への忠誠宣言を拒んだ。新聞記事では、少女は、養父から社会主義を教えられ、アメリカ国旗よりも社会主義の方がよいと主張し、退学になった⁵⁵。その後、ロサンゼルスに入学することになったと新聞は報じている。

1916年3月、アイオワ州で、11歳の黒人少年は、「アメリカは白人の国だ。自分に祖国はない」と言い放ち、地区判事の命令にもかかわらず、学校で国旗に敬意を示すことを拒否した。彼は怠学取締官によって逮捕された⁵⁶。

類似の事例は探せばいくらか出てくると思われる。彼らの信条は明確に拒否され、公教育から排除されたのである。

おわりに

アメリカは南北戦争を経て一つの国になり、市民権法によって「市民権」の概念が確立した。そのことは、多様な人々がアメリカ人になることを可能にした。多様性教育の起源をここに見ることができる。戦争時の旗印でもあった国旗は、その理念の象徴であった。

1890年ころまでは、愛国心の形成と国旗掲揚は直結していたわけではなかった。たしかに、国旗は愛国者をつくるための道具の一つではあったが、国旗そのものよりも、国旗が意味する自由や正義が重視された。国旗には、多様な人々を包み込んでアメリカ人を形成するというコスモポリタンの性格もあった。

1892年のコロンプス記念日式典のころから、国旗そのものを崇拝する傾向が全国で強まっていった。『若者の友』のような児童向けの雑誌や、子ども向けの読本が、子どもの愛国心を掻き立てた。G.A.R.等の退役軍人を中心とした組織も、教育委員会に強く働きかけて、子どもを動員して、公立学校での国旗掲揚と国旗忠誠宣言を普及させようとした。愛国心は論理ではなく、心情であった。

1910年代になると、国旗忠誠宣言を拒否する生徒が放校になるという事件が頻発するようになった。

そのことは、国旗が自由や多様な人々を統合する象徴ではなく、異質なものを排除する道具になったことを意味している。公教育における多様性が否定されたのである⁵⁷。もちろん、この動きを批判する知識人や教育者もいたのだが、大きな国旗掲揚運動のなかで、その声は目立たなくなった。

ウィルソン大統領は、6月14日を、連邦政府が定める国旗記念日に指定した。かつて、国旗を盲目的に崇拝する姿勢を批判したウィルソンであったが、世論の流れに抗しきれなかったのだろうか。この時代の社会思想の潮流のなかで、国旗掲揚運動の意義をあらためて検討することを次の課題にしたい。

注

- グインター（和田光弘他訳）『星条旗：1777-1924』（名古屋大学出版会、1997）；Richard J. Ellis, *To the Flag: The Unlikely History of the Pledge of Allegiance* (University Press of Kansas, 2005).
- 教育史研究のなかで国旗掲揚運動を取り上げたものは少ない。管見では以下の論文のみである。Morris G. Sica, "The School Flag Movement: Origin and Influence," *Social Education*, Vol. 54, No. 6 (Oct., 1990) pp. 380-384.
- Henry Barnard, *School Architecture* (New York: A. S. Barnes & co. 1848); James Johonnot, *Country Schoolhouses* (New York: Ivison, Phinney, Blakeman & Co. 1866).
- グインター（和田光弘他訳）『星条旗』60頁。
- Thomas Nastはこの雑誌の中でたくさんの風刺漫画を掲載し、当時の世論形成に大きな影響を与え、「President Maker」と呼ばれることもある。彼の絵では、アメリカの公立学校は必ず星条旗を掲げ、カトリック系の学校との区別を明確にしていた。このような絵が、1880年代になって国旗掲揚運動が盛り上がったときに大きな影響をもつようになったと思われる。Thomas Nast St. Hill, *Thomas Nast: Cartoons and Illustrations* (New York: Dover Publications, Inc., 1974).
- Harper's Weekly*, Vol. XIII (July 16, 1864), pp. 456-457. Balchによると、南北戦争の時期には、どの公立学校にも国旗掲揚台が設置されていて、何らかの行事があれば国旗が掲揚されていたという。Balch, *Methods of Teaching Patriotism* (New York: D. Van Nostrand Co.) p. 61.
- Balch, *Methods of Teaching Patriotism*, pp. 61-62.
- "[Obituary] George T. Balch," *The New York Times*, April 18, 1894.
- Balch, *Methods of Teaching Patriotism*, pp. 13-83.
- Balch, *Methods of Teaching Patriotism*, p. 64.
- George H. Thomas Post, No. 4, Department of New York, Grand Army of the Republic, *Presentation of National Flag to the Public Schools of the City of Rochester on Washington's Birthday, 1889, in the City*

- Hall* (Rochester, N.Y.: Democrat and Chronicle Print, 1889).
- 12 George H. Thomas Post, op. cit. p. 10.
 - 13 George H. Thomas Post, op. cit. p. 48.
 - 14 George H. Thomas Post, op. cit. p. 12.
 - 15 Wallace Evan Davies, *Patriotism on Parade* (Harvard University Press, 1955) p. 219.
 - 16 グインター『星条旗』148頁。
 - 17 Davies, *Patriotism on Parade*, p. 218.
 - 18 中條献「アメリカ革命の娘たち (DAR) — 国民化のプロセスにおける『時間』と『空間』樋口映美・中條献編『歴史の中の「アメリカ」: 国民化をめぐる語りと創造』(彩流社、2006) 71-91頁。
 - 19 退役軍人を中心とする諸団体の多くは文字が読めなかった。彼らが知識人をひどく嫌った原因と思われる。Davies, *Patriotism on Parade*, p. 247.
 - 20 K.D. ウィギン (大久保康夫訳)『レベッカの青春』(角川文庫、1971年) 149-185頁。
 - 21 『レベッカの青春』172頁、179頁、183頁、181頁。
 - 22 NBC Studios, *Little House on the Prairie* (CD-Rom), Season 2, Disc 7, "Centennial." 日本ではNHKで1975年から8年にわたって放送された。
 - 23 グインター『星条旗』172-184頁。
 - 24 "Schoolhouse Flag," *The Youth's Companion*, Vol. 74 (July 2, 1891), p. 376.
 - 25 "National School Celebration of Columbus Day: The Official Programme," *The Youth's Companion*, Vol. 6, No. 36 (Sep. 8, 1892), pp. 446-447.
 - 26 Ellis, *To the Flag*, chap. 1.; Margarette S. Miller, *Twenty-Three Words* (Portsmouth, Virginia: Printcraft Press, 1976) chap. XIV など参照。
 - 27 "Columbus Day," *Western Kansas World* (WaKeeney, Kan.) July 23, 1892.
 - 28 "Columbus Day — Message to the Public School Teachers of America," *The Record-union* (Sacramento, Calif.), 14, June 1892.; "No Missing Links — In the Chain of Columbus Day Demonstrations," *The Salt Lake Herald* (Salt Lake City, Utah), May 22, 1892. 同じ内容の記事が各地の新聞にある。ベラミーが各地の新聞に働きかけていたことがわかる。
 - 29 Benjamin Harrison, "Proclamation 335-400th Anniversary of the Discovery of America by Columbus," July 21, 1892.
 - 30 Miller, *Twenty-Three Words*, p. 93.
 - 31 "Columbus Day," *Daily Tobacco Leaf-chronicle* (Clarksville, Tenn.), Sep. 21, 1892.
 - 32 Miller, *Twenty-Three Words*, p. 125f.
 - 33 "A Lesson of Patriotism," *Waterbury Evening Democrat* (Waterbury, Conn.), Sep., 12, 1892.; "Children and Columbus Day," *The Austin Weekly Statesman* (Austin, Tex.) August 4, 1892.; "Columbus Day," *The State Republican* (Jefferson City, Mo.), Oct. 27, 1892. など。
 - 34 "Public School Day — Thousands of School Children in the Parade at New York," *Morris Tribune* (Morris, Minn.), Oct. 12, 1892.
 - 35 "Gotham Schools Celebrate," *The Morning News* (Savannah, Ga.), Oct. 21, 1892.
 - 36 "Columbus Day: It is not Forgotten by the People of Minnesota," *St. Paul Daily Globe*, Oct. 22, 1892.
 - 37 "Columbus Day Celebration," *Morris Tribune* (Morris, Minn.), Oct. 26, 1892.
 - 38 "Columbus Day Celebrated," *Omaha Daily Bee* (Omaha, Neb.) Oct. 22, 1892.
 - 39 "Columbus Day was Observed in Great Style. — One of the Finest Displays Ever Made in the Town," *Freeland Tribune* (Freeland, Pa.) Oct. 25, 1892.
 - 40 "Flag Day in the Schools," *The New York Times*, June 12, 15, "All Schools Must Have Flags — The Law Is Mandatory and Must Be Strictly Executed," *The New York Times*, Oct., 1895.
 - 41 "Education in Patriotism," *The New York Times*, April 9, 1898.
 - 42 Charles R. Skinner, *Manual of Patriotism, For Use in the Public Schools of the State of New York* (New York: Brandon Printing Co., 1900).
 - 43 Wallace Foster, *Patriotic Primer for the Little Children, Auxiliary in Teaching the Youth of Our Country the True Principles of American Citizenship*, (Indianapolis, Ind.: Levy Bros. & Co., 1898).
 - 44 Charles F. Dole, *The American Citizen* (Boston: D.C. Heath & Co., 1891, rev. 1906).
 - 45 "Move to Stir Up Patriotism," *The Daily Morning Journal and Courier* (New Haven, Conn.) Feb. 9, 1907.
 - 46 1890 年ころと思われる。Davies, *Patriotism on Parade*, p. 215.
 - 47 *Journal of the 40th National Encampment of the Grand Army of the Republic, 1906* の役職表を見ると、1906年に設置されたことがわかる。
 - 48 "Local Affairs," *The Democratic Advocate* (Westminster, Md.) April 24, 1914.
 - 49 和田光弘『記録と記憶のアメリカ』(名古屋大学出版会、2016) 424頁。
 - 50 この表は、Washington, D.C. で刊行されていた新聞 *The Evening Star* の記事から、筆者が見つけたものを列挙した。
 - 51 E. Benjamin Andrews, "Patriotism and the Public Schools," *The Arena*, Vol. III (Dec. 1890), p. 71.
 - 52 Henry E. Foster, "The Decadence of Patriotism, and What It Means," *The Arena*, Vol. 19 (June, 1898), pp. 741-742.
 - 53 Woodrow Wilson, "Spurious Versus Real Patriotism in Education," *The School Review*, Vol. 7 (Dec., 1899), pp. 602-603.
 - 54 "Won't Uphold Flag, School Expels Boy," *The New York Times*, Oct. 8, 1912.
 - 55 "Child Refuses to Salute Flag," *The Evening Standard* (Ogden City, Utah), Nov. 2, 1912.; "Girl Refuses to Salute Flag: Suspended from School," *The Chronicle = News* (Trinidad, Colo.), Nov. 16, 1912.
 - 56 "Negro Boy Refuses Salute to American Flag," *The Day Book* (Chicago, Illinois), March 22, 1916.
 - 57 1930年代末にエホバの証人が国旗忠誠宣言の拒否をめぐって裁判を起こすことになる。土屋英雄『自由と忠誠』(尚学社、2002)を参照。